

3. 研 究 会

ヒトを含めた霊長類の長期継続野外研究から見えてくるもの

日 時: 5月14日

場 所: 京都大学霊長類研究所

参加者: 約100名

プログラム

開会のあいさつ

伊谷純一郎(神戸学院大学)

ニホンザル集団(岡山県勝山)における個体関係の変遷

糸魚川直祐(大阪大・人間科学)

Long-term studyから何がみえてくるか: メスの life-historyを中心にして

高畑由起夫(鳴門教育大)

霊長類社会の多様性: 新世界ザルの事例を中心に

伊沢紘生(宮城教育大学)

ブッシュマンの社会変化

田中二郎(京都大学・

アフリカ地域研究センター)

西アフリカの野外調査から: 音によるコミュニケーションと身体技法

川田順三(東京外国語大学)

ゴンベのチンパンジーにおける親と子のきずな

ジェーン・グドール(JGI)

司 会: 小嶋祥三、加納隆至、山極寿一、伊谷純一郎、谷泰、杉山幸丸

指定討論者: 松林公蔵、丸橋珠樹、浜井美弥、マイク・ハフマン、早木仁成、森 梅代、菅原和孝、渡辺邦夫、中道正之

世 話 役: 松沢哲郎、森明雄、小嶋祥三、松林清明、大沢秀行

文部省科学研究費・国際共同研究により招へいされたジェーン・グドール博士の参加を得て、本研究会が計画実施された。霊長類は寿命が長いので、その野外研究は、長期間にわたって調査を継続する努力が必要である。ジェーン・グドール博士は、タンザニアのゴンベ(現在は国立公園)で、1960年以来、34年間に及ぶ野生チンパンジーの長期継続研究をおこなっている。4世代にわたるチンパンジーの観察を通じて、とくに母と子のきずなについて話をされた。ゴンベと双壁をなすマハレの長期継続研究について、京大理学部の西

田利貞氏があいにく海外調査にあたって出席できず話がきけなかったのは残念だった。しかし、チンパンジーよりも早く始まった日本におけるニホンザルの野外研究について、糸魚川直祐氏より長期継続研究にもとづく個体関係の変遷にかんする興味深い報告があった。高畑由起夫氏は霊長類のメスの生活史に焦点をあてた比較研究、伊沢紘生氏は新世界ザルの多様な種の社会構造の比較研究を、ともに長期継続研究から得られた資料をもとに展望した。今回の研究会の特徴は、田中二郎・川田順三の両氏を招いて、ヒトの長期継続研究についても、ヒト以外の霊長類と同じ土俵で語っていただいたことである。いずれの発表についても、長期継続研究でしかみえてこない、生活史、行動の世代間の伝播、文化的・社会的変容などが浮き彫りにされた。参加者も最大で約100名に達し、きわめて盛況だった。

(文責: 松沢哲郎)

染色体と肉眼形態からみた霊長類の進化

日 時: 1994年7月20日(水), 21日(木)

場 所: 京都大学霊長類研究所

参加者: 約50名

プログラム

7月20日

座 長: 木村賛(京大・霊長研)

筋系の比較解剖学 児玉公道(熊本大・解剖)

霊長類の指の動きと筋の働き

本間敏彦・坂井建雄(順天堂大・解剖)

ヒトとサルにおける顔面表情筋の発達と

顔面神経の分布 島田和幸(昭和大・解剖)

血管系からみた霊長類の系統発生

一とくに腹腔動脈系を中心に

澤野啓一(雪谷高)

霊長類における上肢動脈系の進化

松本真(川崎医大・解剖)

7月21日

座 長: 平井啓久(京大・霊長研)

染色体進化の生物学的意味と系統分類への応用
今井弘民(遺伝研)

雑種致死と救済遺伝子

山本雅敏(京都工繊大・繊維)

ヒト悪性中皮腫の染色体異常

田口尚久(高知医大・解剖)

蛍光in situハイブリダイゼーション(FISH)に

よる霊長類染色体の研究

平井百樹(東京大・人類)

総合討論

座長: 相見満(京都大・霊長研)

世話人: 木村賛, 相見満, 平井啓久, 毛利俊雄

本研究会は、共同利用計画研究課題「霊長類軟部の比較形態学」の取りまとめと新課題「霊長類の比較遺伝子マッピングと染色体進化理論に関する研究」の開始にあたっての打ち合わせを行うこと、および肉眼解剖による巨視的比較形態学と染色体研究との接点を探ることを目的として開かれた。

(文責: 木村 賛)

ニホンザルの個体数、地域特性、環境要因の定量的把握

日時: 1994年10月28日(金) 13時

～29日(土)13時

場所: 京都大学霊長類研究所大会議室

参加者: 約70人

プログラム

1. 兵庫県のニホンザル個体群の生存に影響する環境条件
清水聡(福井県立大)・武田庄平(東京農工大)
2. 日光におけるニホンザルの個体数とハビタット利用

小金沢正昭(宇都宮大)・

今木洋大(東京農工大)

3. 潜在植生復元の方法論とニホンザル古個体群の推定

池口仁・三谷雅純

(兵庫県立人と自然の博物館)

4. 高崎山生息ニホンザルの個体数増加とその調整の方策

杉山幸丸・大沢秀行(京都大霊長研)

5. 個体数の変動から見た金華山ニホンザルの地域特性

伊澤紘生・遠藤純二・高橋ちさと

(宮城教育大)

6. 林業統計から見たニホンザルの生息環境の変化 - 森林伐採と猿害多発 -

長岡寿和・横田直人(大分短大)

世話人: 杉山幸丸、川本芳、後藤俊二、

山極寿一

近年、野生ニホンザルの人慣れと「猿害」の増加

が著しいが、野外研究にもこれらの影響は強く反映せざるを得なくなった。清水らは聞き込みと実地調査により兵庫県北部の群れの分布を調べてきたが、1または2群で150km²の広大な遊動域を利用していることを突き止めた。10数キロにおよんで街道沿いの耕作地を荒らしながら移動を続けているらしい。また、猿害対策としての大量捕獲が必ずしも個体数の減少につながっていないという情報も得た。小金沢らと伊沢らの10年以上におよぶ野生個体群の個体数変動の粘り強い調査結果によると、平年は微増を続けながら秋のブナの不作(金華山)と冬の多雪が翌年の出産数を減らし、総個体数の激減を招いていること、そして長年月にわたってほぼ安定した個体数が保たれていることが明らかにされた。たとえ少量でも冬に餌付けされると激減年がなくなり、一方的に増加を続けることになる。長岡らは林業統計資料から1961年からの捕獲数激増に先立って森林伐採面積の拡大があり、1975年からの激増に先立っては奥地開発林道の激増があったことを明らかにした。しかし、1985年からの捕獲数5000頭突破の原因はつかめていない。池口らは現環境における潜在植生を復元したところ、兵庫県では現在のサルの分布と落葉樹林面積とに相関があることを予想した。全国に広げた検討が待たれる。

杉山らは餌付けで激増し森林破壊の著しい高崎山の個体数を調節する方法の試案を提出した。基本的には出生数を調節する方法と死亡数で調節する方法が考えられるが、いずれにしろ倫理の問題が避けて通れないと、参加者の議論が沸騰した。個体数増加の原因は野生群についてもほぼ明らかになってきたが、対処の方法はまだ試行錯誤の段階であると言えよう。(文責: 杉山幸丸)

第3回 類人猿研究会

日時: 1994年12月2日(金)～3日(土)

場所: 京都大学霊長類研究所会議室

参加者: 約50名

プログラム

12月2日(金)

テーマ1. 動物園における類人猿の繁殖計画

座長: 上原重男(札幌大)

3:00-4:00

ゴリラの繁殖計画

黒島英俊(上野動物園)
コメンテーター 堀越亮意
(日本モンキーセンター)

4:00-5:00

動物園における類人猿の健康管理
—定期健康診断から学ぶ—

宮下 実(天王寺動物園)
コメンテーター 清水慶子
(京大 霊長研)

12月3日(土)

テーマ2. 類人猿の食性と歯の形態学

座長 木村 賛(京大 霊長研)

9:30-10:10

大臼歯三次元解析

石田英実(京大 自然人類)

10:10-10:50

下顎のバイオメカニクス

山下真幸(独協医大)

10:50-11:30

生体とバイオメカニクス

歯とその周辺の適応変形シミュレーション

堤 定美(京大 生体医療工学研究センター)

座長 北原 隆(上智大生命科研)

11:30-12:10

ケニヤの化石ホミノイディア

国松 豊(京大 霊長研)

1:00-1:40

オランウータンおよび類人猿の歯の形態

内田亮子(科学博物館)

1:40-2:20

アウストラロピテクス研究最近の動向

諏訪 元(東大 人類)

座長 加納隆至(京大 霊長研)

2:30-3:10

ゴリラとチンパンジーの食物比較

山極寿一(京大 霊長研)

3:10-3:50

オランウータンの食性

鈴木 晃(京大 霊長研)

討論者: 清水大輔, 茶谷 薫, 巻島美幸,

竹本浩典(京大 自然人類)

高崎浩幸(岡山理科大)

研究会世話人: 鈴木 晃, 山極寿一, 加納隆至,
杉山幸丸, 石田英実

この研究会は、第1. 2回の類人猿のフィールドでの社会・生態学的研究の討論に続いて、動物園・飼育関係者、及び形態学的研究にたずさわってきた研究者との間の共通の理解と将来への展開の場を探ろうという事で開かれた。

特に今回は、歯の形態学と実際の類人猿の食性との間にどのような関連が探れるかという点に焦点が当てられた。特に類人猿の祖先型とヒトとのミッシング・リングをめぐる、歯の形態にどのような光が当てられるかは興味のそそがれるところであるが、このような分野は、石田英実・諏訪元らの世界の動向の中でも最先端の発見を導いた本人の出席の下に行われた討論であり、意義深いものであった。このような議論の中からの、フィールド、実験室での具体的なテーマに基いた成果の上がってくる事を期待している。

(文責 鈴木晃)

第24回ホミニゼーション研究会

「道具使用と文化の発生」

日 時: 1995年3月16日(木)~17日(金)

場 所: 京都大学霊長類研究所大会議室

参加者: 約80人

プログラム

3月16日 13時30分~18時30分

座長: 松沢哲郎

1. 鳥類における道具使用と文化伝達
樋口広芳(東京大・農・野生動物)
2. サル類の道具使用と文化的行動の伝播
田中伊知郎(東京大・理・人類)
3. チンパンジーの社会的知能をめぐる
西田利貞(京都大・理・人類進化)
4. チンパンジーの道具複合使用と原文化
杉山幸丸(京都大・霊長研)
5. 文化の進化と自然選択の役割
河田雅圭(静岡大・教育・生物)

懇親会

3月17日 9時~16時30分

座長: 三上章允

6. 道具使用と手の進化
久保田競(京都大・霊長研)
7. 道具として使いやすいヒューマンインター

フェース

赤松幹之

(工業技術院・生命工学工業技術研究所)

座長：木村 賛

8. Man the tool-makerとPan the tool-maker
の境界

小野 昭(新潟大・文・考古)

9. 狩猟採集社会における「道具使用」の道具的使
用

市川光雄(京都大・アフリカ研)

10. 人文科学から見た人と霊長類の文化

—アールスの所在—

谷 泰(京都大・人文研)

総合討論

座 長：杉山幸丸

指定討論者：大塚柳太郎(東京大・医)、

安斎正人(東京大・文)、

中道正之(大阪大・人間)、他

世 話 人：杉山幸丸、木村賛、三上章允、

友永雅己、田仲祐介

て「霊長類研究」に投稿が計画されている。

(文責：杉山幸丸)

類人猿研究が一つの峠に達したところで、ヒトとの異同をどう捉えるべきか、道具使用という目に見える現象に焦点を当てて活発な議論が交わされた。チンパンジーの道具使用が「文化」とも言えるほど多様なかたちで見られることは、近年明らかになったことである。ところが、多様性、状況変化に対する柔軟性、地域差など、鳥類に見られる道具使用も遜色がない。なにが道具使用を、ある特定の動物群に突出して出現させているのか。どうしてチンパンジー以外の類人猿には野生状態で道具使用がほとんど見られないのか。これは究明されなければならない問題として残された。

これに対して、人間文化は道具使用などという技術の発達よりも複雑な個体間関係の把握、他個体の操作、社会関係の維持など、知能の発達に強く依存しているという考えが出された。さらに、道具使用の進化も言語による伝達と教える行動が始まらない限り、チンパンジー段階から大きく飛躍することは困難だろうという。

この研究会のブレンストーミングを基礎に、ヒトと動物の違いを明らかにするだけでなく、その間に横たわる溝の実態と溝をつくってきた要因の究明に、さらに力が注がれることを期待したい。なお、この研究会のまとめは、各演者の協力を得